『源氏物語』における産死

―母と子の背負う罪―

吉村悠子

一、はじめに

古来より、出産は命の危険を伴う大事であり、『源氏物語』においても産死する女性が存在する。産死とは、妊娠出産に原因がある死、つまり産婦が産褥に在る期間[注1]に死に至ることである。

産死については、服藤早苗[注2]が古記録、物語などを分析して、当時の出産が命賭けのものであり、貴族層の産死が多いことを論じる。酒井みさを[注3]は『栄花物語』における産死の用例を検討し、物の怪や医療の問題を絡めて論じる。杉立義一[注4]は医学的見地により太古より現代までの出産史[注5]を概括する中で、貴族女性の産死が多い理由を早婚、血族結婚、日常生活に求めている。

本論では、『源氏物語』における産死について、古記録や他の文学を参照しながら考察する。また、産死することの罪深さ、母の産死が子どもに与える影響について論じた上で、産死に対する観念の変化についても論じる。

二、『源氏物語』における産死

『源氏物語』における出産は、当時の死亡率の高さを反映して、喜ばしい反面、命の危険を伴うこととして認識される。その為、女性が懐妊すると出産に対する危惧や安産の為の入念な準備が語られる。ただし、重く患ったとしても出産自体は無事にすむことが多く、産婦の死が描かれることは殆どない。『源氏物語』における産死とは、どのようなものなのだろうか。

まずは、産死の具体例を検証する。aに示すのは、八の宮の北の方の産死である。

a さしつづきけしきばみたまひて、このたびは男にてもなど思したるに、同じさまにてたひらかにはしたまひながら、いといたくわづらひて亡せたまひぬ。

（橋姫⑤一一八頁）

八の宮夫妻に待望の子どもが誕生し、続けて北の方は第二子を懐妊、出産する。出産自体は「たひらか」であ

り無事に中の君が生まれたが、「いといたくわづらひて」と産後の肥立ちが悪く北の方は亡くなっている。北の方の死については、『細流抄』が「此宮をうみ給ふとてうせ給へる」と注釈しており、その他の注釈書も中の君を出産したことが原因で亡くなったと解釈する。出産自体は無事にすんだが、産後の経過不良の為に北の方は産死した。

次のbに示すのは、光源氏と北山の僧都の会話であり、紫の上の母の産死が語られている。

b「安からぬこと多くて、明け暮れものを思ひてなん亡くなりはべりにし。もの思ひに病づくものと目に近く見たまへし」―中略―「それはとどめたまふ形見もなきか」と、幼かりつる行く方の、なほたしかに知らまほしくて、問ひたまへば、「亡くなりはべりしほどにこそはべりしか。」（若紫①二一三頁）

光源氏の問いに対し、僧都は傍線部で母が亡くなった頃に紫の上が生まれたと答えている。『岷江入楚』が「母君のなく成し比生れ給し」と注釈し、『新編日本古典文学全集』では「出産後まもなく母が亡くなった」と解釈する。点線部の僧都の言葉からは、紫の上の母は、物思いにより亡くなったかのようにも解釈できるが、産後間もない死ということから考えれば、死の直接の契機となったのは出産である。

女性の死が、出産と関連させて語られていれば、それは産死だと判断されるほど、当時の出産による死亡率は高かった。『源氏物語』と同時代の古記録にも産死の記事は頻出する。例えば、一条天皇皇后定子は、第二皇女媛子を産み、その出産が原因で亡くなる。『日本紀略』長保二年十二月十五日条に「皇后宮定子於二前但馬守平生昌朝臣宅一。有二御産事一。皇女媛子」と出産が述べられ、続く十六日条に「皇后崩給」と崩じたことが記される。定子と直接関わりのある藤原行成の『権記』にも「皇后宮御産□已非常也」「此寅終許已崩了給」とその出産と死が伝えられる。また、『百錬抄』には「皇后宮定子依二産事一崩」と死の原因が出産にあることが明記される。

その他にも、『日本紀略』康保元年四月条では「中宮産二皇女選子一」と藤原安子が二十四日に出産し、「中宮藤原安子崩二于主殿寮一」と二十九日に崩じている。この安子の死因が「産生之後。有二此事一」と出産にあると捉えられていることから、古記録においても産褥に在る間の死を産死と捉えていることが確認できる。また、『権記』長保二年七月三日条では、「右大将殿北方昨日亡、産後有病云」と藤原道綱室が産後の病で亡くなった。『小右記』長和四年十一月十七日条では、「故山井三位四娘産間、

今暁死去、兒全存」と子どもは無事に生まれたが、母の藤原永頼娘は出産の間に死亡する。『御堂関白記』長和五年七月二十九日条では、「左少弁経頼妻亡、是産事也」と出産が原因で源経頼の妻が亡くなるなど、産死の記録は多数ある。

数多くの産死の記録が示すように、出産により産婦が亡くなることは決して珍しいことではなかった。紫の上の母の死を紫の上の誕生と関わらせて語れば、それは産死だと見做されるほど当時は出産による死亡率が高い。出産は命の危険を伴う大事という当時の出産事情と産死の多さからも、紫の上の母は産死だと判断される。

また、ここで『源氏物語』における産死の定義を確認する。cは女三の宮の光源氏に対する発言である。

c「なほ、え生きたるまじき心地なむしはべるを、かかる人は罪も重かなり、尼になりて、もしそれにや生きとまると試み、また亡くなるとも、罪を失ふことにもやとなむ思ひはべる」と、（柏木④三〇一頁）

女三の宮は薫を出産後しばらく経っても心身共に回復せず、出家したいと光源氏に訴える(注6)。出家を望む理由として、出産が原因で死ぬ人は罪が重いこと、出家すれば助かるかもしれず、また回復せず亡くなったとしても出家の功徳があることを述べる。

cでは、死の懸念を抱く女三の宮自身がこのまま亡くなれば産死であり罪が重いと思っている。女三の宮は、懐妊中から物思いの為に憔悴し容体が悪かったが、それは間接的要因にすぎない。死の主因が出産であるなら、それは産死だと考えられた。

また、この場面の前に今上帝主宰の七日の産養があり、女三の宮は出産後七日以上経過してからcの発言をする。『源氏物語』においても、出産の間や出産直後だけではなく、産婦が産褥に在る間に出産が原因で死に至ることを産死だと捉えている。

『源氏物語』における産死とは、出産が原因で死に至ることである。母体が常態に回復するまでに出産が原因で死に至る場合を産死と捉えていた。八の宮の北の方や紫の上の母は、出産から死に至るまでの日数は不明だが、産褥に在る間に亡くなったと考えられ、また出産が死の主因であることが明らかなため、産死なのである。

三、葵の上の産死

前節の紫の上の母、八の宮の北の方に加えて、葵の上も夕霧を出産後程なく亡くなっており、産死したと考えられる。葵の上は出産後も「なほいとなやましげにのみしたまへば」（葵②四三頁）と容態が悪いことが描かれ、

最後の対面で光源氏が「なほやうやう心強く思しなして、例の御座所にこそ」（葵②四五頁）と述べたように、亡くなるまで産褥に在り養生していたことは確かである。

しかし、葵の上の死に関しては見解が分かれており、『日本古典文学大系』（以下大系と略す）は「産褥熱であろうか」とするが、諸注釈の多くが亡くなる直前の発作を物の怪の為とする。そこで、懐妊から出産までを検証した上で、葵の上の死について考察する。

葵の上の懐妊は、まず「心苦しきさまの御心地になやみたまひても心細げに思いたり」（葵②二〇頁）と語られる。当時は出産における死亡率が高い為に、懐妊を喜ぶ一方で誰もが「ゆゆし」と危惧を覚えており、葵の上も不安を感じていた。安産を願い修法などが行われたが、次の㋐に示す物の怪が葵の上を苦しめていた。

㋐もののけ、生霊などいふもの多く出で来てさまざまの名のり―中略―執念きけしきおぼろけのものにあらずと見えたり。大将の君の御通ひ所ここかしこと思しあつるに、「この御息所、二条の君などばかりこそは、おしなべてのさまには思したらざめれば、恨みの心も深からめ」―中略―過ぎにける御乳母だつ人、もしは親の御方につけつつ伝はりたるものの、弱目に出で来たるなど、むねむねしからずぞ乱れ現はるる。（葵②三二頁）

㋐には執念深い物の怪をはじめ様々な「もののけ、生霊」が描かれている。葵の上が懐妊以前に物の怪に悩むことはないため、物の怪の出現は懐妊によるもの、つまり「弱目に出で来た」のだと考えられる。

そして、葵の上は複数の物の怪により衰弱し、出産時には重態に陥る。危篤状態の葵の上に呼ばれ、言葉を交わした為に、光源氏は執念深い物の怪の正体を知る。その直後、葵の上は「かき起こされたまひて、ほどなく生まれたまひぬ」（葵②四一頁）と無事に夕霧を出産する。しかし、葵の上は出産により「いたう弱りそこなはれ」（葵②四四頁）、回復が遅れていた。そして㋑に示すように、人々が油断し光源氏達が出かけた隙に急逝する。

㋑殿の内人少なにしめやかなるほどに、にはかに、例の御胸をせきあげていといたうまどひたまふ。内裏に御消息聞こえたまふほどもなく絶え入りたまひぬ。（葵②四六頁）

産後の容体が思わしくなかった葵の上は、急な発作に耐えきれず亡くなった。葵の上の死に左大臣は悲嘆し、大宮も悲しみのあまり床に就く。それに対して、光源氏は「悲しきことに事を添へて、世の中をいとうきものに思ししみぬれば」（葵②四六～七頁）と葵の上の死の悲

しさに加えて、その死に六条御息所と思われる物の怪が絡むことを悲しむ。

しかし、執念深い物の怪の正体を知り、それを葵の上の死と結びつけて考えるのは光源氏のみである。㋐の点線部ではその正体が紫の上かとも取沙汰されたように、他の人々には物の怪の正体が明らかにされていない。諸注釈の多くが葵の上を死に導いた㋑の傍線部の発作を物の怪の仕業だと捉えるが、それらもこの時の物の怪を六条御息所とは断定しない。㋐には様々な物の怪が描かれ、また出産直後にも「御もののけどもねたがりまどふ」（葵②四一頁）と複数の物の怪が無事の出産を悔しがって騒ぐなど、葵の上が悩まされた物の怪は複数存在する。

そもそも、出産前後に物の怪が出現し産婦を悩ますことは珍しいことではない。物の怪は「弱目に出で来」るものであり、出産時に禍を成すことが多かった。例えば、中宮彰子の初産は五戒を受けるほどの難産であり、「已無御産気、但邪気出来」（『小右記』寛弘五年九月十一日）と物の怪も出現する。また、『小右記』万寿二年八月廿八日条では、藤原長家室が早産の後に「母不覚、為邪気被取入」と物の怪の為に意識をなくす。長家室は赤班瘡を重く患ったことに加えて、「日夜為邪気被取入」と絶えず物の怪に悩まされた為に出産の翌日「新中納言室亡」と亡くなる。

『源氏物語』でも、紫の上が「ただにもおはしまさで、もののけなどいと恐ろしきを」（若菜下④二一五頁）と懐妊中の明石中宮に物の怪が移ることを心配したように、妊娠中や出産の際には物の怪に脅かされやすいという認識があった。それ故に、藤壺の出産遅延[注7]も「御もののけにやと世人も聞こえ騒ぐ」（紅葉賀①三二五頁）と物の怪の仕業と捉えられた。このように、妊娠出産の過程の中で物の怪が出現し異常事態が起きることは、葵の上に限られた特殊なことではなく、妊産婦に起こり得るごく普通の事として捉えられていた。[注8]

そして、葵の上の死は、後には「言ふかひなきこと」（葵②六五頁）として周囲の人々に諦観と共に受け入れられており、急逝であり早世ではあっても物の怪による横死だとは思われていない。光源氏も「過ぎにし人は、とてもかくても、さるべきにこそはものしたまひけめ」（葵②五二頁）と葵の上は寿命だったと思っている。大系が葵の上の死因を産褥熱と解釈したように、当時の感覚では、葵の上は命がけの行為である出産の過程で命数が尽きた、寿命による死だと捉えられるのである。

また、葵の上の死と六条御息所を結び付けて考えていた光源氏も、一方では葵の上の死は出産のせいだとも

思っていた。それは、次に示す、出産が迫った明石女御の身を案じる光源氏の心中から確認できる。

大殿の君、ゆゆしきことを見たまひてしかば、かかるほどのことはいと恐ろしきものに思ししみたるを、対の上などのさることしたまはぬは、口惜しくさうざうしきものからうれしく思さるるに、

（若菜上④一〇三頁）

光源氏は、葵の上が夕霧出産後に亡くなった為に出産を恐ろしいことと思い知り、紫の上に子ができないことを残念に思う一方で喜んでもいた。それ故に、若年の明石女御の懐妊は、光源氏にとって喜ばしい一方で、「いとゆゆし」（若菜上④八六頁）いことだった。ここで光源氏が明石女御の出産に危惧を抱くのは、葵の上の死の原因が出産にあると考えるからである。光源氏にとっても葵の上の死は出産ゆえの死、産死だったといえよう。

葵の上は、夕霧を出産後に容態が回復しないまま急逝した。葵の上の死を、光源氏は六条御息所と結びつけて考えたが、その他の人々は悲しみはしても異常な死とは見做さなかった。光源氏も一方では葵の上は寿命であり、産死であると思っていた。また、妊娠出産における物の怪の出現がありふれた出来事にすぎないことから考えても、葵の上は産褥に在る間に容態急変して亡くなった、産死なのだと考えられる。

四、産死した女性の罪

『源氏物語』における産死を検証してきたが、ここで産死した女性の抱える罪について考察したい。女三の宮が二節のcで「かかる人は罪も重かなり」と述べたように、『源氏物語』では産死した女性は罪が重いと考えられている。それは、dに示す懐妊中の中の君の心内からも確かめられる。

dこのなやましきこともいかならんとすらむ、いみじく命短き族なれば、かやうならんついでにもや、はかなくなりなむとすらん、と思ふには、惜しからねど、悲しくもあり、また、いと罪深くもあなるものを、

（宿木⑤四一三頁）

中の君は、「いみじく命短き族」であるから自分もこの出産で死んでしまうのではないかと心配し、そうなった場合には罪深いことだと思う。中の君も女三の宮と同様に、産死は罪深いと考えている。出産による死の懸念を抱く女性が、産死の罪を意識することから、産死は罪深いという観念が浸透していたことが窺える。(注9)

しかし、女三の宮の発言も、中の君の心内も産死の罪が重い理由については説明がない。諸注釈でも、大系が

中の君の発言について「お産で死ぬのは子を後に残すので、大層罪障が。」と注釈するが、『孟津抄』が「産にて死たれはいよ〳〵つみふかし」[注10]と注釈するように、他の注釈書では出産で死ぬことは罪深いという当時の考え方を指摘するにとどまっている。

なぜ、産死は罪が深いのか。まずは、大系が指摘する子どもを後に残すという罪障が考えられる。例えば、八の宮の北の方は、中の君のことを「今はと見えしまでいとあはれと思ひてうしろめたげにのたまひし」（橋姫⑤一一九頁）と臨終の直前まで案じて八の宮に遺言を残している。生まれたばかりの中の君を後に残して逝くことは、北の方にとって非常に気懸かりで執着が残ることだった。子を残す母の心情については、和泉式部が娘を亡くした時に残された孫を見て「とゞめおきて誰をあはれと思ふらん子はまさるらん子はまさりけり」（『後拾遺和歌集』五六八）[注11]と詠む。娘を亡くしたことに悲嘆しているために、子を「あはれ」と思う気持ちの方が勝るだろうと推測する。母親は、後に残す子どもを案じて強い執着を残すものだと考えられる。

しかし、当時は死に臨む際に強い執着を残すべきではないと考えられていた。例えば、阿闍梨は臨終の床にある八の宮が姫君達に会いたいと望んだのに対し、「いよいよ思し離るべき」（椎本⑤一八八頁）事とその執着を諌める。八の宮が亡くなり、せめて亡骸とでも対面したいと望む姫君たちに対しても、阿闍梨は「今はましてかたみに御心とどめたまふまじき」（椎本⑤一九〇頁）とお互いに執着を断つべきであると諭す。強い執着は往生を妨げると考えられた為に、互いに執着することは諌められた。

生後間もない子どもを残して逝くことは、母親が子どもに強い執着を残すため、罪深いことである。説話には、難産で亡くなり成仏できなかった女性が怪異となって登場する。『今昔物語集』巻第二十七「頼光郎等平季武値産女語」は、平季武の剛胆さを讃える怪異譚だが、この説話に川を渡る者に児を抱けと脅す産女という妖異が登場する。説話の最後で産女の正体について「女ノ子産ムトテ死タルガ霊ニ成タル」（一三八頁）と出産で死んだ女性が霊になったという説が紹介される。難産で亡くなった女性が成仏できず、産女となって怪異を生じるという説話から、産死する女性の罪深さの一端がうかがえよう。

ただし、この産死の罪は仏教により救済され得るものだと考えられた。女三の宮は、二節のcの点線部で出家を望む理由として、仏教による産死の罪の救済について

言及していた。古記録にも、功徳を求めての五戒や出家の記事がみられる。『権記』長保四年十月条では、行成の妻が産死する直前に出家する。行成の妻は十四日に女児を出産したが、十六日には「産婦病甚重」と容態が悪化し、「請為尼」と尼になることを望んだ。行成の手配により出家したが、「丑剋気漸絶」と亡くなる。行成の妻は死の直前に出家しており、出家の功徳を求めて、特に産死の罪を軽減させることを求めて出家したものと思われる。

時代は下るが、法然は「子うみて死ぬる物は、つみと申候はいかに」と問われた時に[注12]、「それも念佛申せは往生し候」と念仏により往生できると答える。この法然の言説について、西口順子[注13]は、「産死した女性の罪というのは、産穢と死穢の二重の穢ということより、女人が罪業のゆえに往生できないとの教説と、生と死の境の行為として立ちはだかっていた出産とのからまりで説かれていた」と述べる。産死は、元より罪業深い存在である女性を更に罪深くするものだが、念仏により救われると考えられた。

また、この産死した女性の罪を産穢と死穢の二重の穢と捉えることだが、これは仏教ではなく、『延喜式』巻第三の臨時祭49にある触穢応忌条[注14]に「凡そ穢悪の事に触れて忌むべきは、人の死は三十日を限り〈葬る日より始めて計えよ〉、産は七日、―後略」とあることに拠る。この「穢」に関しては、従来から記紀神話との関係が指摘される[注15]。

そこで、記紀におけるイザナミの火神出産とその死について検証する。

Ⅰ火之迦具土神と謂ふ。此の子を生みしに因りて、みほとを炙かえて病み臥して在り。―中略―伊耶那美神は、火の神を生みしに因りて、遂に神避り坐しき

（『古事記』四一頁）

Ⅰは、伊耶那美神が火の神を生んだことにより「神避」った神話である。『日本書紀』巻第一神代上にも「伊奘冉尊、軻遇突智が為に焦かれて終ります」（三九頁）と伊奘冉尊が軻遇突智の出産により「終」ったとあり、記紀共に火神を出産したことが原因でイザナミが亡くなったとする。これは神話であり、また子が火神である為に母が焼かれて亡くなるという特殊例であるが、産死の例でもある。イザナミの火神出産とその死に「穢」意識の根源があることからも、産死の罪は「穢」に関する罪、イザナミに端を発する神道的な罪も抱えていると考えられる。

産死が罪深い理由は、子どもへの執着を残す、往生できずに産女のような怪異を生ず、産穢と死穢の二重の穢であるなど仏教的、神道的な様々な罪が生じるからであ

る。その他にも、親に先立つ不孝や残した子どもへの継子いじめなど複数の罪や懸念から、産死は罪深いという観念が浸透したのだと思われる。

五、母の産死を背負う子ども

『源氏物語』では産死は罪深いと考えられていたが、その罪は仏教により救済され得るものだった。しかし、紫の上の母、葵の上、八の宮の北の方は死ぬ前に出家したとは語られず、罪を抱えたまま亡くなっている。ここで問題としたいのは、仏教に対するこの物語の姿勢ではなく、罪を抱えたまま産死した母を持つ子どもについてである。母の産死は子どもにどのような影響を与えるのだろうか。

大宮が「母に後るる人は、ほどほどにつけてさのみこそあはれ」（少女③六九）と述べるように、母を亡くした子どもは「あはれ」な存在と考えられた。しかし、出生時に母を亡くした子どもと、幼少の時に母を亡くした子どもでは明らかな違いがある。幼くして母を亡くしたことから一層鍾愛された光源氏や女三の宮に比べ、紫の上、夕霧、中の君はそれぞれ複雑な事情と葛藤を本人も周囲も抱え込む。それは、幼い時に母を亡くした大君と自身の出生時に母を産死で亡くした中の君という姉妹の違いに明確に表れる。

八の宮の北の方は中の君を出産して間もなく亡くなったが、死の直前「ただ、この君をば形見に見たまひて、あはれと思せ」（橋姫⑤一一九頁）と中の君を自分の形見として愛してほしいと八の宮に遺言を残す。北の方は二人の娘を産んでおり、大君と中の君は続けて生まれたため、幼い子どもを残して逝くという点では二人に差はない。しかし、北の方が二人の娘を共に大事にしてほしいと頼むのではなく、中の君に関してのみ遺言を残したのは、中の君が母と引き換えに生まれた子として父や周囲に疎まれる可能性があったからである。実際に、八の宮も「前の世の契りもつらきをりふしなれど」（橋姫⑤一一九頁）と思うなど、中の君が北の方の死と引換えに誕生したことに対して負の感情が全くないわけではない。しかし、宿世なのだと諦観とともに北の方の死を受け止め、その北の方が死の間際まで心に懸けて遺言を残したのだからと、葛藤を乗り越えて中の君を愛しく思う。

ただし、女房達は「「いでや、をりふし心憂く」などうちつぶやきて、心に入れてもあつかひきこえざりけれ」（橋姫⑤一一九頁）と北の方の死を代償として中の君が誕生した為に、心を込めて世話をしようとしない。中の君は父には疎まれなかったが、女房達から冷遇される。

また、八の宮が葛藤を乗り越えて愛することから、女房達の冷たい態度と相俟って、中の君への愛情が印象的であるが、大君に対しては葛藤を抱く必要がないため、それを乗り越えることが描かれないだけである。八の宮は「いづれをも、さまざまに思ひかしづききこえたまへ」（橋姫⑤一二〇頁）と二人を同じように愛し傅いている。

大君と中の君に対する周囲の葛藤や対応の違いから、自身の出生時に母を産死で亡くした子どもは、ただ「あはれ」な存在として扱われるわけではなく、誕生時から何らかの重荷を背負っていることが確認できる。中の君の場合には、母の遺言があり、父が葛藤を乗り越えたからこそ、父に愛される。しかし、紫の上や夕霧の場合には、中の君とは異なり、父との関係は複雑である。

紫の上は、父の兵部卿宮が生きているにも関わらず「あやしき身ひとつを、頼もし人にする人」（若紫①二一八頁）と祖母一人を頼りにする人と語られる。つまり、紫の上にとって父は頼れる存在ではない。また、尼君亡き後に「尼君を恋ひきこえたまひて、うち泣きなどしたまへど、宮をばことに思ひ出できこえたまはず」（若紫①二六一頁）と頼りにしていた尼君のことは恋い慕うが、元々馴染んでなかった父宮のことは特に思い出さないなど、紫の上の心情的にも父宮とは疎遠である。一時的に良好な関係を築くこともあるが、兵部卿宮が光源氏の須磨流離の時に世間を憚り紫の上と交流を断つことなどもあって、親子でありながら基本的には疎遠な関係である。

夕霧は、母亡き後は母方の祖父母に愛育され、光源氏とは離れて育つ。光源氏は葵の上の死後、「かかる形見さへなからましかばと、思し慰む」（葵②四九頁）と夕霧という形見がなければもっとつらかっただろうと気持ちを慰めており、夕霧を疎ましく思うことはない。しかし、光源氏は夕霧を引き取り同居しようとは考えず、唯一の嫡出男子でありながら、元服も母方主宰で行われた。何より、夕霧自身が「もの隔てぬ親におはすれど、いとけけしうさし放ちて思いたれば、おはしますあたりに、たやすくも参り馴れはべらず」（少女③六九頁）と父に距離を感じていた。

そもそも、夕霧は母方への帰属意識が強く[注15]、母方とのつながりを強調して描かれる。光源氏の家を継ぐべき子どもであるのに、光源氏とのつながりは二の次である。光源氏も、琴の琴を伝える意志が全くないことに象徴されるように、夕霧に何かを継がせようという意識が希薄である。頭中将から家の後継者とされるだけではなく、和琴や蹴鞠などの私的なことまで受け継ぐ柏木とは対照的である。夕霧と光源氏の関係性も常に一定というわけ

ではないが、光源氏が積極的に何かを夕霧に伝えようとすることがないために、どこか疎遠な印象を受ける。

母を産死で亡くした子ども達は、愛されるにせよ、遠ざけられるにせよ何らかの葛藤を抱え込んでおり、父をはじめ周囲の人々との関係が複雑である。紫の上と夕霧に関しては、祖父母からは母の命と引き換えに誕生したけれども愛育されること、[注17]むしろ父との関係が複雑であることが共通する。

また、夕霧や紫の上が父との関係が複雑なものになる一因として、記紀からの影響を考えてみたい。

Ⅱ伊耶那岐命の詔はく、「愛しき我がなに妹の命や、子の一つ木に易らむと謂ふや」とのりたまひて、乃ち御枕方に匍匐ひ、御足方に匍匐ひて哭きし時―中略―是に、伊耶那岐命、御佩かしせる十拳の剣を抜きて、其の子迦具土神の頸を斬りき。

（『古事記』四二～三頁）

Ⅱは、四節のⅠにおける伊耶那美の火神出産による死を受けての伊耶那岐の反応である。伊耶那岐は妻の死に泣き伏し、妻の命を奪った迦具土を斬り殺す。『日本書紀』巻第一神代上においても「伊奘諾尊恨みて曰はく、「唯一児を以ちて、我が愛しき妹に替へつるかも」とのたまひ」、「遂に帯かせる十握剣を抜き、軻遇突智を斬りて三段に為したまふ」（①四三頁）と伊奘諾尊は妻と引き換えに生まれた軻遇突智を「恨み」斬り殺す。記紀共に、イザナキは妻の命を奪った子どもを許せずに殺害する。つまり、出生時に母を亡くした子の背負うものとして、まず父の「恨み」がある。

記紀に語られた父子の在り方が物語に影響を与えているが、物語では父の「恨み」はイザナキほど激しくはなく、子が殺されるほどの事態は考えにくい。しかし、母と引き換えに生まれてきた子どもに対して、単純に愛情を傾けることができず冷遇してしまうことはある。

出生時の状況が原因で、子どもが父から負の感情を向けられることについては、『うつほ物語』における仲忠の宮の君への冷遇が挙げられる。『うつほ物語』では、安産で生まれた仲忠が「孝の子」として語られる一方で、難産で生まれた宮の君は父である仲忠に「いと恐ろしき者」（国譲下③三八〇頁）「心恐ろしき者」（楼の上上③四四〇頁）と不孝の子であるかのように語られる。宮の君は祖父母に養育されており、仲忠とは現実でも心理的にも距離があり、父子関係は疎遠であった。[注18]実際には女一の宮は産死しなかったのだが、難産で母を苦しめた者として、宮の君は記紀におけるカグツチのように父から負の感情を向けられる。

そして、紫の上や夕霧が父との葛藤を抱えることに、記紀や『うつほ物語』からの影響が考えられる。また、結果的に父に愛育される中の君も、母の産死の影響がないわけではない。四節のdで中の君は産死は罪深いことだと思っていた。それは同時に、産死した母北の方は罪深かったと思っていたことにもなる。母北の方の産死やその罪が中の君に影を落としている為に、中の君は出産への危惧を強く抱き、妊娠が経過不良となり、難産となる。[注19] 紫の上や夕霧とは違い、父との関係に影響することはなかったが、中の君は自らの妊娠出産において母の産死の影響を受ける。

紫の上や夕霧が父との複雑な関係を抱え、中の君が周囲の女房たちから冷遇され、自分の出産に影響を受けるなど、自身の出生時に母を産死で亡くした子ども達は、人生の出発点から何らかの欠落を抱え、重荷を背負って生きていくのである。

六、終わりに

『源氏物語』における産死とは、出産が原因で産婦が死に至ることである。具体的には紫の上の母、葵の上、八の宮の北の方が産死した。また、産死は仏教的・神道的な複数の罪を抱える為に罪深いという観念があった。産死の罪は仏教による救済が示唆されるが、『源氏物語』においては産死した女性は罪を抱えたまま亡くなる。そして、産死は産婦が罪を背負うだけではなく、出生時に母を亡くした子どもにも、父と疎遠な関係になる、周囲からの冷遇を受けるなど、重大な影響を与えるものだった。

最後に、産死に対する考え方が『源氏物語』を境に変化していることにも触れておきたい。イザナキがイザナミの死を子である火神の為として恨み、俊蔭娘の安産は子である仲忠の功績として仲忠が孝の子とされたように、『源氏物語』以前の作品では、安産や難産、産死の責は子どもにあった。しかし、『源氏物語』においては、女三の宮の発言や中の君の心内語に語られるように、産死の罪は母にあることが明記されている。子どもたちも母の産死を背負って生きているが、産死の罪はまず第一に産婦が背負うものである。産死の罪が子から母へと転化されており、産死に対する観念の変化が見て取れる。『源氏物語』においては、産死は母と子の背負う罪へと変化しているのである。

※『源氏物語』の本文は『新編日本古典文学全集』によって頁数を示すが、『大島本源氏物語』『源氏物語大成』

『河内本源氏物語校異集成』『源氏物語別本集成』により、若干の校訂を加え、異同により問題の生じる箇所は注にて適宜考察する。『古事記』『日本書紀』『うつほ物語』『今昔物語』『紫式部日記』は『新編日本古典文学全集』による。他の本文は通行本文によるが、表記は私的に改めた箇所があり、傍線等は私意に即して付した。

注

(1) 産褥期とは母体が常態に回復するまでの期間を指し、現在では産後六～八週間である。平安時代においても、母体が回復するまで養生する期間が設けられており、中宮彰子は九月十一日に皇子を出産した後に「十月十余日までも、御帳出でさせたまはず」(『紫式部日記』一五〇頁)と約一ヶ月の間養生した。なお、ミレイユ・ラジェ『出産の社会史―まだ病院がなかったころ』(一九九四年、勁草書房)においても、産婦の死亡率を調査する時に、出産後三十日以内の死を出産による死と推定する。出産から一ヵ月後の敗血症や壊疽、発熱による死も出産に原因があると考えられる。

(2) 『平安朝の母と子』(一九九一年、中央公論社)。

(3) 「『栄花物語』における御産による死没記事について」(『講座平安文学論究第七輯』一九九〇年、風間書房)。

(4) 『お産の歴史―縄文時代から現代まで』(二〇〇二年、集英社)

(5) 出産に関わる研究については、平安時代の儀礼を分析した平間充子の「平安時代の出産儀礼に関する一考察」(『お茶の水史学』一九九一年四月)や、新生児の産育儀礼を民俗学の視点から論じた矢野敬一の「誕生と胞衣―産育儀礼再考―」(『列島の文化史4』一九八七年、日本エディタースクール)などもある。

(6) 女三の宮は出家したいと望むが、既婚女性の出家は婚姻関係の解消を伴う為に夫の許可が必要である。そのため、光源氏に許しを求める。既婚女性の出家については、勝浦令子「既婚女性の出家と婚姻関係―摂関期を中心に―」(『家族と女性の歴史　古代・中世』一九八九年、吉川弘文館)が詳しい。

(7) 『小右記』寛仁四年閏十二月十七日条で「皇后宮亮為任女懐任已及十七箇月」と長期懐胎していた藤原為任女が「去夕平安産女」と出産する。真偽はともかく、当事者の認識としては懐妊十七ヶ月目にして漸く出産した。それに比べれば、藤壺の二ヶ月の出産遅延は当時の認識では物の怪による多少の遅延にすぎない。

(8) 当時は、妊娠出産に何か異常があれば物の怪の仕業だと捉えられた。例えば、行成は妻の後産がまだ済まな

いという報告を受けた時に「邪気所為歟」（『権記』長徳四年十二月三日）と物の怪の仕業かと思い、僧都に加持を依頼する。また、前述した彰子の初産では『紫式部日記』にも「御もののけどもかりうつし」（一三〇頁）と物の怪についての記載がある。しかし、道長は『御堂関白記』に「終日悩暗給」と記すのみであり、彰子の「悩」の詳細は記さない。行成も『権記』に「午剋中宮誕男皇子、仏法之霊験也」と仏の霊験によって皇子を出産したことのみを簡潔に記す。皇子誕生という大事とは違い、出産における物の怪の出現は特筆すべき程のことではなく、悩みの一つにすぎなかったことが窺える。

(9) 罪の意識については、服藤早苗が前掲書において「産死した女性は罪障深いという仏教観が、貴族一般に受け入れられていたことは、確実であろう」と述べる。

(10) 『細流抄』に「懐妊にてうせなは罪ふかゝるへしと也」とあるように「懐妊中」の死は特に罪が深いとする別の解釈がある。しかし、中の君は母が産死した事実と懐妊中の自身の境遇を思い合わせており、出産時の死と懐妊中の死が明確に区別されているとはいえない。

(11) 和泉式部Ⅰ（『私家集大成』）は三句「思ひけん」。和泉式部Ⅲ、Ⅳは四句五句が「こはまさりけりこはまさるらん」。

(12) 「百四十五箇條問答」『昭和新修法然上人全集』（一九五五年、浄土宗務所）。

(13) 『仏法と忌み』『女の力―古代の女性と仏教』（一九八七年、平凡社）。

(14) 『延喜式』（虎尾俊哉編、二〇〇〇年、集英社）。

(15) 三橋正は「『延喜式』穢規定と穢意識」（『延喜式研究』二、一九八九年）の中で、『延喜式』に規定された「穢」が祓・祓によって清められる性質ではないという本質的な相違などから、「穢」とは日本固有のものであり神話から連続するという従来の見方には否定的であり、『延喜式』の穢規定は神祇令の「斎」の規定から展開したことを論じる。ただし、その中で「穢意識の淵源には「火」の神を「産」んだことによるイザナミ命の「死」（＝神話世界における死）のイメージが投影されていることはほぼ間違いない」とも述べている。

(16) 夕霧の母方との関係の深さ、父の光源氏との疎遠さについては拙稿「夕霧の家と筋」（『人物で読む『源氏物語』第16巻内大臣・柏木・夕霧』二〇〇六年、勉誠出版）にて論じた。

(17) 母を亡くした子どもは祖父母に愛育され、その紐帯が描かれることが多い。和泉式部の歌に、「子のみこそ子

のかはりには恋しけれ親恋しくは親をみてまし」（和泉式部Ⅰ、四七九）とあるように、亡くなった子どもの代わりに、孫を鍾愛するのだと思われる。

(18) 仲忠は安産で生まれた犬宮を愛育する一方で、難産で生まれた宮の君を冷遇する。宮の君も祖父兼雅のことは慕うが、「大将をば、よそに見放ちたてまつり」（楼の上上③四四二頁）と仲忠とは心情的にも疎遠である。『うつほ物語』における産死や、孝の子、不孝の子に関する問題は、母を産死で亡くした涼と「孝の子」である仲忠との対比を通して改めて考える必要がある。

(19) 中の君は懐妊してから経過が悪く、出産も「からうじて、その暁に、男にて生まれたまへる」（宿木⑤四七二頁）と語られることから難産だったと思われる。

（よしむらゆうこ／県立愛知看護専門学校非常勤講師）